

## タスク活動を通して、思考力・判断力・表現力を高める子ども

— 中学2年「旅行先を決めよう ～Unit 4～」の実践から —

### 1 単元のねらい

- ペアワークにおいて、間違ふことを恐れず話す。
- 助動詞を正しく用いて、旅行先の利点や助言・忠告を相手に伝えることができる。
- 助動詞を用いた文の構造を理解する。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

本校の生徒は全体的に英語学習に前向きに取り組み、意欲的に言語習得に努めている生徒も多い。コミュニケーションを支えるための基本文の暗唱やパタンプラクティスなどのドリル的なエクササイズにも一生懸命取り組んでおり、基礎的な知識を身に付けている。また、基礎的な知識を活用して、自分の考えや思いを英語で表現しようとしている生徒の姿も見られる。一方、場面に応じて適切に表現したり、その場で瞬時に思考・判断して表現したりする場面になると、既習の表現を正しく用いることができていない生徒も少なくない。その要因はいくつか考えられるが、その一つとして使用場面や言語の働きを意識していないためではないかと考える。生徒はこれまでに助動詞 can, may を学習している。これらは話し手の心的態度を表現することができる助動詞である。しかし、Speaking Plus 1 (先生にお願い) で助動詞 may を学習した際に、may を使った疑問文に対して Sure. No problem. ではなく、may を使って Yes, you may. と答えてしまう生徒もいた。may がもつ高圧的なニュアンスや働き、使用場面を意識せず言語の形式だけに目を向けていたためである。このような生徒の実態から、それぞれの助動詞でどのような思いを伝えることができるのか、どのような場面で使用されるのかということへの意識を高める必要がある。

生徒の多くは小学校で外国語活動を通して自分のことを伝え、友だちのことが分かってうれしいという思いをたくさん経験してきている。中学校においてもこの思いを大切に、実際の言語使用につながる言語活動を充実させる。そうすることで生徒は助動詞を用いて主観を交え、表現の幅を広げて自分の思いや考えを正しく相手に伝えることができると考え、本単元の授業を構想した。

#### (2) 本単元の内容と外国語活動・英語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元では have to, will, must を扱うが、これまでに習った can や may を含めた活動とし、使用する言語形態が限定されない言語活動とした。さらに、自分が相手に伝えたいことを適切かつ正確に表現するためにはどのような助動詞を用いればよいのかを、自分自身で思考・判断し、表現するような言語活動を設定した。

新出と既習の文法を選択し、比較しながら使用することで生徒は言語の使用場面や働きを実感できる。また、友だちとのやりとりの中で、自分が言いたいことを伝えるのにこの表現では伝わらない、もっと適切な表現はないだろうかといった試行を通して、自分の思いや考えを相手に正しく伝えることができるようになって考えている。そこで、本単元では試行の場面としてタスク活動を取り入れた。タスク活動はある程度の決まりはあるものの、自由に自分の思いを伝え合い、相手と会話を進めて課題を解決する活動である。その時に、相手の反応を見て受け入れたり、自分の主張を通したりと状況を判断して自分で表現を選択し、使い分けることが大切であり、相手意識が必要不可欠

である。自分の思いを独りよがりで表現するのではなく、相手と自分を意識しながら、思考・判断した上で表現する。そして相手が表現したことについて、さらに思考・判断し、また自分が表現するというスパイラル構造が生まれる。しかも、課題を解決するという共通の目標があり、自分と相手に会話を通して協調性も生まれてくる。現実の言語使用場面と類似した、自分が主体となる活動である。そこには自発的な発話が期待される。学びをいかす子どもの姿を求めて、このような言語活動を取り入れることが思考力・判断力・表現力の育成につながるのではないかと考えた。

### (3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

単元を通して、新出の助動詞を導入する際には「動詞の前に置いて文を作り、疑問文にする時は主語の前に出す」などといった形式面や操作面のみを強調して指導するのではなく、話し手のどのような気持ちを表現できるのか、どのような場面で使用されるのかに視点を当てて指導した。第2次3時にwillとbe going toの違いについて班で話し合い、その理由を学級で共有する学び合いを設定した。また、第3次にはhave to とmustは共に「～しなければならない」という日本語訳が当てられるが、全く同じ働きをするのだろうかという疑問を投げかけるはたらきかけを行い、それぞれの言語使用に対する意識を高めたいと考えた。

タスク活動のフィードバックを与える際にも、助動詞の形式面や操作面の正確さのみ焦点を当ててではなく、話者の気持ちにも目を向け、助動詞の使用の適切さにも焦点を当てた。このように言語の働きや使用場面に対する意識を高めるようなはたらきかけを行うことが大切であると考えたからである。そして、単元末にFuzoku English Dayを設定した。国際交流員、ALT、島根大学の留学生との交流を図る中で、それぞれの出身国について助動詞を用いて情報のやりとりを行い、お互いの考えや気持ちを伝え合った。タスク活動はこのような実際の言語使用につなげるための活動であると考えている。

## 3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	ホームステイのあり方と一般的な心構えについて知ろう。	1	・ have to / do not have to を用いた文の形・意味・用法を理解し、表現する。
2	will と be going to の違いを考えよう。	2	・ will を用いた文の形・意味・用法を理解し、それを用いて友だちと簡単な対話をする。
		3	◇ 班で will と be going to の違いとその理由を考え、学級全体で共有する。
3	have to と must の違いを考えて、友だちの悩み事に対する助言の手紙を書こう。	4	・ must / must not を用いた文の形・意味・用法を理解し、ホームステイの困り事相談とそれに対する助言、結果報告を読む。
		5	・ have to と must の違いを理解し、友だちの悩み事に対する助言の手紙を書く。
4	助動詞で気持ちを伝えよう。	6	・ 助動詞を用いて、自分の気持ちを相手に伝える。
	旅行先を決めよう。	7	◇ 既習の助動詞を用いて友だちと会話して、二人の条件に合った旅行先を決める。（タスク活動）
		8	・ パフォーマンステスト

## 4 授業の実際

### (1) 言語の使用場面に対する意識を高める学び合い

学びをいかす子どもの姿を求めて、自然なアウトプットができるような言語活動を取り入れて授業を構想した。その際に、言語の使用場面や自分とのつながりを意識できるようなインプットを与えることが大切であると考え、言語の使用場面に対する意識を高める学び合いの場を設定した。

#### ① willとbe going to～

Willとbe going to～の使用場面の違いやその背景（状況）の違いを考えることで、それぞれがもつ意味や働きの違いに対する意識を高めることができるのではないかと考え、二つの例文を与えた（図1 a.b）。そして、それぞれの表現が使用される背景（状況）を考え、学級全体で共有した。

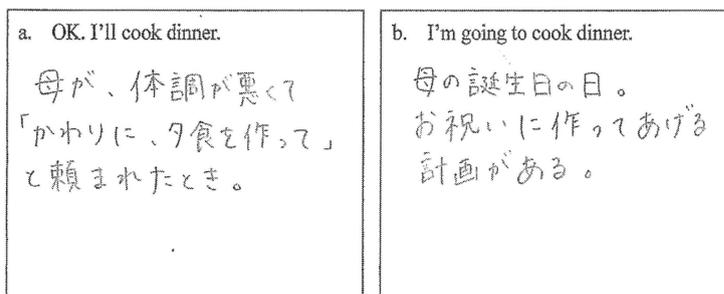


図1：生徒Aが考えたwillとbe going to～が使用されている背景

生徒Aはwill, be going toに当てられる訳「～するつもり」「～だろう」を頼りに文意をとらえて背景を考えたのではなく、will, be going toを使うとそれぞれどのような思いを伝えることができるのかということに焦点を当てて背景を考えていた。

#### ② have to～, must

have toとmustの運用に対する意識を高めるために、have toとmustは全く同じ働きをするのだろうかという疑問を投げかけるはたらきかけを行った。また、次のような2つの場面を生徒に提示してhave toとmustのどちらを使うとよいかを考えさせた。右下はその時の話し合いの様子である（図2）。

(場面1)  
明日はデートなのに髪が伸びて不格好になっている。「髪を切らなくては。」 (must)

(場面2)  
明日は部活があって忙しいだろうから今日のうちに「髪を切らなくては。」 (have to～)

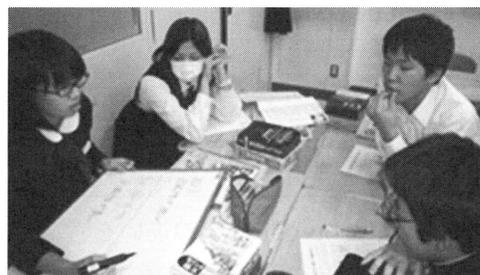


図2：話し合いの様子

次に左下のような流れで友だちの悩み事に対する助言の手紙を書く活動を行った。次はそのときのやりとりである。自分の悩み事を相談している生徒Bは自分の思いを表現するために、have to～とmustを使い分けている。このように言語の働きを意識したインプットを与えたことにより、自然なアウトプットにつながったと推測される。

活動の流れ

1. 自分の悩み事を書く
2. ストップがかかるまで手紙を隣の人へ回し続ける
3. ストップがかかった時に手元にある手紙にアドバイスを書く

生徒B：I want to be tall. I want to be 162cm tall. What do I have to do? Must I drink milk?

生徒C：Yes!! You must drink milk and you must go to bed early!!

## (2) タスク活動を通して、思考力・判断力・表現力を高める子ども

場面や状況に応じて、自分が相手に伝えたいことをその場で判断して表現するような活動を取り入れることが思考力・判断力・表現力の育成につながると考え、タスク活動をペアで行った。この活動のタスクはお互いがもっている海外の情報を交換しながら二人が納得のいく「旅行先を決める」ことである。一度ペアで会話をしたあと、あらかじめビデオに録画しておいた下のような教師のパフォーマンスをフィードバックとして見せた。そして、そのやりとりのよかった点とアドバイスを学級全体で共有（シェアリング）することで、各自のパフォーマンスを向上させるきっかけにした。

教師A：I want to watch sports. I want to eat something good. I can't speak English. I don't have a passport. So I can't get a VISA.

教師B：I'm good at English, but I can't . . . I want to go to Europe. But I like animals . . .

教師A：How about Italy?

教師B：I want to go to Europe, so it's OK.

教師A：We watch our bags carefully because many pickpockets are in Italy.

生徒からは教師のパフォーマンスに対して次のような意見が出た。

- ・情報の交換をあまりしていない。
- ・目をあわせて会話をしていないので、笑顔でしたほうがいい。
- ・教師Bは自分の言いたいことを言えていない。
- ・教師Aはイタリアでの注意事項も伝えることができている。
- ・教師Aは最後の文で助動詞 mustかhave to を使わないといけない . . . ?

これらの意見を学級全体で共有し、「助動詞の使用」「情報量」「相手意識」についての視点を自分のパフォーマンスにいかし、表現の幅を広げて自分の考えや思いを相手に伝えるようはたらきかけた。特に「助動詞の使用」については、We must watch our bags carefully. とWe have to watch our bags carefully. の話者の気持ちの違いを考え、助動詞の使い分けについての意識を高めるはたらきかけも行った。このようなフィードバックを与えた後で、もう一度同じタスク活動を行った。次に示すのは生徒Dと生徒Eのやり取りである。

生徒D：Hi.

生徒E：Hi. I want to go to India because I can ride an elephant.

生徒D：That's nice. In India we must get あっ違う Must we get VISA?

生徒E：Yes, we must.

生徒D：Oh, I can't get VISA.

生徒E：So we don't go to India. I want to touch animals. How about you?

生徒D：I want to go to China. Because I don't have to get VISA and we can eat Chinese food. We can watch \*panda, but we mustn't touch panda. In China we have to speak Chinese.

生徒E：Oh, that's a good idea. But I can't speak other . . . another . . . other language, so we じゃなくてI don't go China. I want to go America because we can watch a baseball game.

生徒D：That's great. I like baseball very much. Must we get VISA in America?

生徒E：No. \*So let's go America.

生徒Dは疑問文ではmustを文頭に出さなければならないことに会話の途中で気づき、言い直しをしていることから、助動詞の形式的操作について意識が高まっていることが分かる。mustとhave to-の使い分けについては話者の気持ちを表現するので会話からは判断がつきにくい、生徒Dは使い分けもしていることが分かる。

最後にタスク活動でのやり取りを参考に、旅行先がどこに決まったのか報告する英文を書いた。ここでは会話の流れや用いた助動詞などの表現を再現する中で、タスクを達成するための方略や言語の使用を見直し、修正することをねらいとした。次は生徒Dと生徒Eがペアでタスク活動を行ったあとのそれぞれの報告の英文とふりかえりである。

I want to go to China because I want something good to eat. In China, we don't have to get a VISA. And we can eat Chinese food. But (生徒Eの名前) wanted to touch animals. In China, we can watch pandas but we mustn't touch pandas.

I like to watch sports. In America, we can watch a baseball game. So we'll go to America. (生徒D)

I'll go to America with (生徒Dの名前). I want to go to India because I can ride an elephant. But he doesn't have a VISA. We must get a VISA if we go to India. So we don't go to India.

He wants to go to China because we can eat Chinese cooking. I'm good at English, but I can't speak any other languages at all. So we don't go to China.

I said, "We can watch a baseball game in America." He wants to watch a baseball game, too. So we'll go to America. (生徒E)

Q 今日の授業を振り返って、できるようになったこと、できなかったことを書きましょう。

最初は自分の情報を少ししか言えなかったけどだんだん反応なども返せるようになったのでよかったです。でもなかなか旅行先が決まらなかったのが上手く進めていきたいです。 (生徒D)

今日の授業では「That's a good idea.」などの相づちをうったり反応したりすることができました。でも少し情報量が少なかったかなとも思いました。自分だけが言うのではなく互いが話し合い二人が納得する場所が決められるようにしたいです。 (生徒E)

Q 今日の授業で感じたこと、思ったことを書きましょう。

とても難しいと思いました。でもだいぶ自分のもっている情報を英語にできてよかった。 (生徒D)

今日の授業ではやっぱり情報量が少ないと感じました。だから、使える言葉を増やすことが大事だと思います。さらに助動詞を正しく使えるようになることも大事だと思います。 (生徒E)

生徒Eはタスクを達成するための方略として、情報量が少なかったことや情報の交換の仕方についての気づきを得ている。また助動詞の使用についても課題を見いだしていることが分かる。さらに、生徒D生徒Eの両方が自然に会話を進めるためにはThat's a good idea.などの反応を示すことが大切であることを意識しながら会話を進めていたこともうかがえる。

生徒Eの報告文では会話中の前置詞の誤使用も修正されており、接続詞を用いて文を豊かにして

いることもわかる。その場で自分が伝えたいことをとっさに口にする際には正しく運用できていないが、書くときのようにある程度、思考・判断・表現する余裕があるときには正しく運用できていることを意味している。この観点からも自分が相手に伝えたいことを表現するためにはどのような言語表現を用いれば良いのかを、その場で瞬時に判断して使うような言語活動を設定することは言語を適切に運用する力を確かなものにするに有効であると思う。そしてこのような言語活動を取り入れることが学びをいかす子どもの育成につながるのではないかと考えている。表1は授業後に行ったパフォーマンステストの評価と結果である。

表1： パフォーマンステストの評価と結果

学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
			A	B	C
旅行先を決めよう。	助動詞を正しく用いて、旅行先の利点や助言・忠告を相手に伝えて旅行先を決めている。	パフォーマンステスト(後日)	旅行先の利点や助言・忠告、自分の気持ちを相手に伝えるために正しく助動詞を用いている。	旅行先の利点や助言・忠告を相手に伝えるために正しく助動詞を用いている。	助動詞を使わず、旅行先の情報のみを相手に伝えている。
パフォーマンステストの結果			56%	38%	6%

94%の生徒が「おおむね満足できる」以上の結果になった。また、上で示した生徒のふりかえりからも分かるように教師のはたらきかけによって生徒の姿に変容も見られた。これらのことから、タスク活動と教師のはたらきかけを通して、思考力・判断力・表現力を高めることができたと言えるのではないだろうか。

## 5 成果と課題

場面に応じて適切に表現したり、その場で瞬時に思考・判断して表現したりする言語活動を取り入れてきた。これらの活動を通して生徒は自分の思いをどのように相手に伝えたらよいのか、そのためにはどのような言語形態を用いたらよいのだろうかを試行を繰り返した。その際に、学びをいかそうとしている生徒の姿も見られた。また、言語の働きや使用場面に対する意識を高めるはたらきかけを行ったことで、「違う表現が存在することには訳がある」という感覚をもつようになってきている。「ことば」に対して以前より敏感になってきているのである。そして、タスクを遂行するために相手の反応や返答に応じてその場の状況を判断して会話を進めており、思考力・判断力・表現力の育成にも一助となる実践となった。タスク活動でペアの協調性が増し、タスクを遂行することができたときの喜びを感じた生徒も多かった。このことがさらなる学習への意欲にもつながったこともこの実践の成果の一つであると考えている。

「助動詞を正しく用いて、旅行先の利点や助言・忠告を相手に伝えて旅行先を決めている」という評価規準を設け、パフォーマンステストで評価を行った。しかし、タスク活動の意義はタスクを遂行することにあるとする考え方もあるので、タスクを遂行するまでの過程を評価することがどうだったのかを検討することが今後の課題である。評価は別の場面で評価するべきだったのではないかと思うところもある。言語活動と評価の在り方について研究を深め、その後の指導に効果的に取り入れていけるような評価の在り方について考えていきたい。(文責 高田 純子)